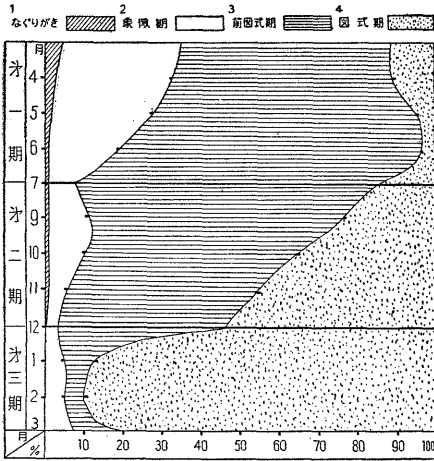


描画の発達

—五才児の一年間—

石川 春代



第一図 五才児の一年間の絵の変化

私の粗の子どもたちの絵の一年間の変化をもとにして、描画の発達を記してみる。

○五才児においては、第一図のように発達の過程をとりながら、就学前には、ほとんどの子どもが図式期に入り、その特徴を示している。しかし、まだ象徴期、前図式期の子どもが五〜七%残っていることも知らなければならぬ。

○それは四月頃の象徴期から前図式期、図式期と移行する際、いつも型がくずれながらも次の型に移行している。それが図式期にもなると大体形がととのって、図式期の終りともなると、その動揺も少なくなつて、ある固定した形式になつていくのである。

○更に描画過程における変化は、子どもそれぞれ個人のな性格によつても異なるものである。

○こうした幼児の描画の発達を考へてみると、つねに前進したり、後退したり、さまざまな経験を繰り返しながら、ある段階に発達するということがわかる。

○また、このように表現形式の型が変化するということは、幼児の心理並びに行動の変化を写し出すものと考えられる。

就学前の絵の発達

1 この頃の絵になるとくわしく観察されてかかれるようになり、また自分たちの生活がそのまま、絵にかかれるようになる。

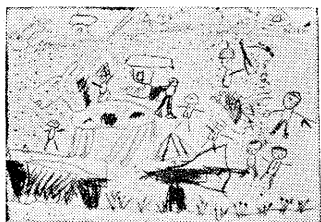
2 六月頃には部分的な断片的な表現がなされているが、十二月頃になると、時間的経過など全体的な把握がなされ、えがかれる。

3 第二図①②のように、七月頃のしゃぼん玉遊びの絵では人物がくわしくかかっているが、十二月の消防車見学の絵では、消防自動車や消火のようすに興味をもち、それらがくわしくかかれ、人物は省略されて簡単にかかっている。

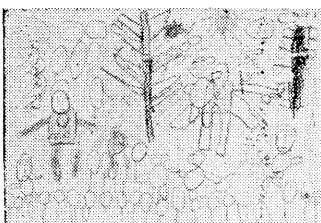


第二図

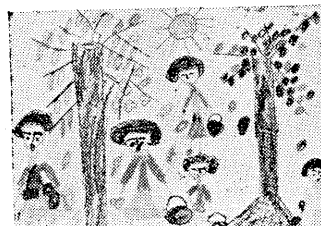
第三圖



第四圖



第五圖



たものが、一本の基底線上に木、人などが、地上に立てられ、空や太陽は高いところにかかれて、実在するものの形、位置関係などの表現が考えられるようになる。しかしこの基底線は、子どもが見たことの経験から、かくのではなく、空間をあらわそうとしてかいているのである。

5 第三図のように、基底線が二本かかれていたり、上部に緑色で山や仏舎利塔が示され、その上に太陽がかかれていたりなど、子ども独自の遠近法によるもので、このように子どもは遠いものを紙面の上部にかき表わすことによって遠近をあらわしている。しかしまだ立体的な性質や、遠近法

あたって、男女の差異がめだってくる。(第四・五図)

四・五図

結び

幼児期から就学期の絵は、ほとんど見たようにかくのではなく、情緒的経験にもとづいた空間の表現方法がみられ、したがって、子どもの生活経験を豊かにしてやることが重要である。そして、子どもの成長発達過程を十分に理解して、はじめて子どもの絵をふくめて、その生活全体を正しくみちびくことができ、子どもたちを幸福に育てていくこともできるのである。私たちはあせらず、この幼児たちと共に、この幼児を育てる絵画の道を一步一步ふみしめていきたい。(熊本幼稚園)

による描写などでは

きず、いわば擬写実的なあらわし方で、平面的図形のあつまつたようなものと考えられる。

こうして幼児の絵がものの形がある概念的な様式に到達してくるころ、描画に

幼児の教育 第五十九巻 第三号

三月号 © 定価五〇円

昭和三十五年二月二十五日印刷

昭和三十五年三月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。